

座禅草

― 被援助力 ―

小説『徳川家康』の著者として有名な山岡荘八氏は、凜として病苦に耐える人だったらしい。この山岡氏と同じ病院に入院したことがある遠藤周作氏は、(自分で語っておられるのだが)苦痛を訴えて医者や看護婦に頼る人だった。婦長から「同じ小説家でも一流の山岡先生とは大違いです」と叱られたとか。

座禅草は、座禅を組む僧侶に姿が似ることがその名の由来とか、山岡氏の凜とした闘病生活に通じるイメージがある。もし末期の苦痛を引き受けなければならぬ時が来たら、私は山岡氏のマネができるくらい良いと思っていた。しかし、最近は遠藤流でもかまわないと思うようになった。人に頼ろうが頼るまいが、痛いものは痛いし、寂しいものは寂しい。凜としていようが、周囲をお騒がせしようが、「自分持ちの苦」はやっぱり自分が引き受けるのである。要は美的感覚としてどちらを選ぶかの問題である。遠藤氏は神の許しを信じるカトリックであった。だから恰好悪くとも、じたばたしても、許しを信じておられたのだと思う。「痛い。苦しい。何とかしてくれ」と大騒ぎして死んでいくのもウソがなく痛快ではないか。

私の父はどちらかと言えば苦を一人で担う方だった。だから急逝の報せを受けた私は大泣きした。苦を訴えなかっただけに晩年の父の心情を様々に推測し、父に対してしてあげられなかったことを数えたからである。父と比べると母は、「よくこれほど涙があるものだ」と自分で言うほど、苦痛を訴え、そしてよく泣いた。そのおかげで息を引き取った時、「これでラクになったね。ご苦労さま」と心の中で声かけすることができた。十年も病氣と闘っていたこともあるが、やはり心を開いて苦を訴え続けた母の生き方が、残された者の心の平安をつくったのだと思う。こう考えていくと、誰にも言わず一人で苦しむのは潔くもあるが、案外周囲の人間を心配させているのかもしれない。ひよっとすると本人だけが、誰にも迷惑をかけていないことを確信しているかもしれないが…。

「同僚性の形成をめざす講座」が本年度も開講される。教師が自信を喪失して疲れ果てたとき、たった一人の同僚にでもそれを話すことができれば、休職まで追い詰められることはないのではないか? …そういう発想から作られた講座である。

被援助力(援助される能力)が問われる時代になっている。追い詰められたとき、心を開いてその弱味を話すことが出来れば、同僚の支援を受ける可能性が生まれる。毅然として一人で苦に耐えるのは一見して立派に見えるが、そういう人は弱味を開示できる人と比べて適応性に欠けるといふ統計もある。

五月の森林公園は、山桜・コブシ・山ツツジ・イワウチワ・水芭蕉など可憐な花々に彩られる。杉の木立の中に、木漏れ日を浴びて開く座禅草は、それらの花々を見て浮き立つ心をきゅっと引き締められる。:「いずれにせよ、自分持ちの苦は、自分で引き受けなさいよ。最終的には!」と、教えてくれているようでもある。



沢田の杖塾 主宰 齋口章